先日は、お高作、原稿拝受仕り、八重垣
大さうに有難く存じます。
早速拝読いたしました。大へん面白いと思ひます。
新聞の方は、お断りする方、宜敷もう動
し、自分で大切な方と思ひます。動
機をつゐては、なほ、大へん云はれて居つ
ておりますが、原作の方、僕の心中の
機会（大阪 おまや出版）が、ナンニンマス
クと違つて近後なる事多が原つて仕様ない
と。

たゞ、動く怨とは中さが、もう少し、大部の
書物よりもっと低の方の作物より、
もっと一段に、もう少し、あたりの傾向は
言葉が話すみやつたと考へます。
原稿の体裁をつけられて来二の方法
の時は、是非動の部をとかせ、作をんとと
います。
先ゝ月例の中よりまりましたと思ひ、特社
原稿 いま動は書中よりの方。
傑作話の創作家は、心理描写の基礎と

長田秀雄用箋

つ以上の心理を基礎として如何ならうと
ですが、これ丈も、この十三を立つて人間の
心を追究して行くつもりです。
以上の部には主寄りでおさい。まづは以上
まで。

敬白

長田秀雄

奥さまへ

長田秀雄用箋

親展

東京市牛込区
北山伏町三四
長田秀雄